

第Ⅱ章 研究の具体

以下の資料について、略称を用いることとする。

総則：「小学校学習指導要領 総則編」及び「中学校学習指導要領 総則編」平成 29 年告示 文部科学省

当研修センターでは、第 20 次研究として、「子どもを主語にした主体的・対話的で深い学びの実現」を目指し、研究内容を前述の 1、2 に分けて、実践研究を進めることとした。今年度はその 1 年次であるため、第 19 次研究の成果と課題を踏まえながら、以下のように研究内容を定めることとした。

1 児童生徒の思考に沿った単元デザインの工夫

(1) 課題設定、見通し (2) 自己決定、自己選択 (3) 単元レベルでの振り返り

2 児童生徒の深い学びを充実させる本時の展開の工夫

(1) 発問 (2) 必要感のある学び合い (3) 本時レベルでの振り返り

1 児童生徒の思考に沿った単元デザインの工夫

現行の学習指導要領解説の「1 改訂の経緯及び基本方針」における「(2) 改訂の基本方針」に 5 つの基本方針が示されている。その内、③ 『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善の推進」では、「子供たちが、学習内容を人生や社会の在り方と結び付けて深く理解し、これからの時代に求められる資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けることができるようにするためには、これまでの学校教育の蓄積を生かし、学習の質を一層高める授業改善の取組を活性化していくことが必要であり、我が国の優れた教育実践に見られる普遍的な視点である『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善（アクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善）を推進すること」が求められている。また、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を進める上で、ア～カの 6 つの留意点が挙げられている。エの「1 回 1 回の授業で全ての学びが実現されるものではなく、単元や題材など内容や時間のまとまりの中で、学習を見通し振り返る場面をどこに設定するか、グループなどで対話する場面をどこに設定するか、児童生徒が考える場面と教師が教える場面をどのように組み立てるかを考え、実現を図っていくものであること」について着目し、再確認することとした。

また、単元を通して、児童生徒にどのような資質・能力を身に付けさせたいかを明らかにし、単元目標を設定する必要があることから、単元をデザインする際には、教師の思いを一方的に押し付けるのではなく、当然のことながら児童生徒の実態を踏まえ、児童生徒が自らその方向に向かうように単元を構成し、学びの質を高めていくことが大切である。

つまり、資質・能力の育成を目指して、「主体的・対話的で深い学び」の視点に立ち授業改善を行うには、1 単位時間だけではなく単元レベルで授業を構築することを前提として、児童生徒が興味や関心に応じて自ら学習を進めていくことが重要であると考えられる。

研究内容 1 では、児童生徒の思考に沿って、単元レベルでの指導計画や評価計画等の工夫を目指し、以下の 3 つの研究を進める。

(1) 課題設定、見通し

児童生徒は、実生活や実社会とつながりのある具体的な活動や体験を行うことによって意欲的で前向きな学習者になると考えられる。そのため、現実的で質の高い「課題」との出会いによって、課題を解決していく過程そのものが児童生徒にとって充実したものとなるようにしな

ければならない。つまり、どのような課題が目の前の児童生徒にふさわしいかを吟味し、いわゆる本物の一人一人の学びとなるよう、単元デザインを工夫することが、学習者の「主体的な学び」の実現につながると考えられる。

また、課題を設定する際には、その教科の本質となる、概念的で大きな課題を設定することが重要である。抽象度の高い課題にすることで、児童生徒は自らの興味や関心に応じて学習を始め、それぞれの道筋で別々の学びを進めて行くことになる。児童生徒の学びが複線化していくことで、必然的に学び合いや協働が生まれ、他者との交流が生まれる。そうした児童生徒同士の学びのつながりの中で、知識を相互に関連付けたり、考えを精査したりすることとなり、「深い学び」へとつながるものと考えられる。

また、児童生徒が自らの学びを進めて行く上で、単元における学習イメージを明確にすることが大切である。自分が目指すべき姿や、そこへ到るための学習の道筋をはっきり認識することで、児童生徒は学習に前向きになり、自ら学んでいく。併せて、単元全体の大くくりな見通しと、1単位時間の限定された見通しがあることによって、学びが連続したものとなり、1単位時間で学んだ新しい知識や技能が互いにつながり、関連付いていくことが期待できる。

抽象度が高く、教科の本質となる概念的な課題を設定することで、児童生徒は自身の興味・関心に応じた学びを進めることとなり、学びが複線化し、協働的な学びへとつながる。また、見通しを共有し、目指すべき姿やそこに至る学習過程を明確化することで、学びが連続していく。

(2) 自己決定、自己選択

第19次研究において、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」を研究テーマとして、研究と実践を重ねてきた。その成果として児童生徒の資質・能力育成のため、「個別最適な学び」や「協働的な学び」を一体的に充実させていくことが重要であり、さらに「主体的・対話的で深い学び」の実現に欠かすことのできない学びの姿であることが検証されている。

とりわけ、一人一人の児童生徒が興味・関心等に応じて、自ら適切に学習課題や学習の進め方を決定したり選択したりして、学びを進めていけるように指導を工夫することが重要である。その際には、児童生徒に「『何を』『どの程度まで』委ねるのか」ということを十分に吟味することが求められる。

「何を」委ねるか、ということについては、「学習内容」と「学習方法」の二つが考えられる。

「学習内容」について、児童生徒が自ら考えて決定したり、教師側が選択肢を与えたりする際には、「何を学べば課題や問題の解決に向かうことができるのか」ということを児童生徒が明確にイメージすることが大切である。ゴールのイメージを共有したり、目指す姿のモデルを示したりして、そこに到るまでに何を学べばよいかを具体的に考えることが、自らの興味・関心に応じて「学習内容」を定めることにつながっていく。

「学習方法」については、「学習形態」「使用教材」「時間配分」等が考えられる。「学習形態」は、個人で学んだり、ペアで学んだり、あるいはグループや学級全体で学んだりすることを、児童生徒が自らの意志で決めたり選んだりすることができるように、指導計画を設定する必要がある。

また、「使用教材」は、教科書のみならず、ICT 機器を用いてインターネット上で情報を収集したり、共有・活用して、他者参照をしたりすることが考えられる。さらに、児童生徒の興味・関心に応じて、実際に見たり触れたり感じたりすることができる実物を用意することも効果的である。児童生徒がこれらを自由に活用することができるように、単元の指導計画に意図的に位置付けていくことが重要である。

「時間配分」は、その学習活動にどれだけの時間を掛けるのかを、児童生徒がそれぞれの学習進度や理解度に応じて、自ら決めて学習をすることである。児童生徒が自分の学習状況をメタ認知し、調整していくことを通して、どのくらいの時間を掛けたいのか、あるいは掛けるべきなのか、ということを手で判断して、自らの学びを構築することができるようになる。

これらは、教師が一方的に、無計画に児童生徒に任せるべきものではない。課題や問題の解決のために、どのような学習を進める必要があるのかを、児童生徒が自ら決めたり選択したりするためには、「学び方」を学ぶ必要がある。単元や教科内のみならず、他教科とのつながりも意識しながら、自らの学びを調整し改善することができるように指導をすることが重要であり、児童生徒の実態に応じて「どの程度まで」委ねることが最も効果的なのかを考え、指導改善を繰り返すことが求められる。

「個別最適な学びと協働的な学び」を一体的に充実させて、児童生徒自身に学習内容や学習方法を決定させたり、選択させたりすることが大切である。また、児童生徒が自分自身でそれらができるようになるために、教師からの適切な指導や評価が重要である。

(3) 単元レベルでの振り返り

振り返りには様々な効果があると考えられるが、とりわけ単元を通した学びの実感や手応えなどの前向きな感情は、次の学習行為を生み出す重要な動機となり、自ら学び続ける意志をもった、主体的に学ぼうとする児童生徒の育成につながる。

研究内容 1-(2)の通り、教師が指導計画を立てる際には、児童生徒がそれぞれの興味・関心等に応じて、自ら適切に学習内容や方法を決定したり選択したりすることができるように工夫することが大切である。そのような計画のもと学習を進めてきた児童生徒にとって、単元の終末時に、「その単元でどのような学びを実現することができたか」を振り返ることは、とても重要なことと言える。

単元全体における自身の学び方を振り返ることで、自分の意志で決定した学習内容や方法が自分の資質・能力の向上に結び付いたと実感することができる。児童生徒は自己の変容や成長をより強く認識し、次の単元の学習の意欲を高め、主体的に学習に取り組むことができるようになる。また、自身の学習の方法や時間配分等に不十分な点があった場合、次の単元に向けて改善策を考え、自己調整を図ることにもつながる。

そのためには、振り返りを行う際に、児童生徒の発達段階に応じて明確な「視点」を与えることが大切である。例えば、「できたこと、分かったこと」の内容を振り返るだけでなく、「なぜできたのか」を振り返ることで、次の単元や別の内容の学習でもそれを継続しようという意欲に結び付く。また、グループや学級での交流を振り返ることで、友達と協働することの意義を感じたり、仲間と力を合わせることのよさや楽しさといった前向きな感情を生み出したりすることにつながる。

もちろん、振り返りは単元の終末時にのみ行うのではなく、1 単位時間の終末時にも重要である。また、教師はその内容をよく把握し、必要に応じて形成的な評価を行うことも求められる（研究内容 2-(3)を参照されたい）。

適切な振り返りは、児童生徒の学びの意欲を高めるものとなる。自己の成長を実感するだけでなく、自己調整や学習改善にもつながる。そのために、児童生徒の発達段階に応じた振り返りの視点を与えることも重要であり、教師による形成的な評価も求められる。

2 児童生徒の深い学びを充実させる本時の展開の工夫

総則では、「主体的・対話的で深い学び」について、3つの視点に立った授業改善を行うことが示されている。特に「深い学び」として、「習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた『見方・考え方』を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう」ことが示されている。

「深い学び」を実現する上で、当センターでは、児童生徒は以下の4つの視点を常に意識して学習を進めることができるよう、授業の展開を工夫することが重要であると考え。

- ① 既習内容や経験と関連付けてより深く理解すること
- ② 情報を基に思考して、それぞれの考えを構築すること
- ③ 課題意識を高め、問題を見だし、それを解決しようとする事
- ④ 思いや考えを基にして、新たな考えや意見、作品等を創造すること

総則では、「主体的・対話的で深い学び」は、「必ずしも1 単位時間の授業の中で全てが実現されるものではなく、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通して、（中略）授業改善を進めることが重要」とされているが、学習を見通し、振り返る場面をどこに設定するか、グループなどで対話する場面をどこに設定するか、児童生徒が考える場面と教師が教える場面をどのように組み立てるかなど、1 単位時間の中で展開を工夫することも重要であると考えられる。

当センターでは、現行の学習指導要領が告示された平成 29 年から 5 年に渡り（第 17～19 次研究）、「深い学び」を実現するために、上記の視点を意識した「単元構成の工夫」について研究を重ねてきた。第 20 次研究では、これまでの研究の成果と課題を基に、上記①～④の4つの視点を本時レベルまで落とし込み、授業改善を図ることができないか、研究及び授業実践を行う。なお、1 単位時間において、これら4つの視点全てが網羅されるものではない。

研究内容 2 では、児童生徒の「深い学び」を充実させるために、本時レベルでの授業の構築や展開の工夫を目指し、以下の3つの研究を進める。

(1) 発問

授業における教師からの発問は、児童生徒が思考を働かせて、深く考えるために非常に重要である。特に、「深い学び」の視点に関して、各教科等の学びにおいて深まりの鍵となるのが「見方・考え方」である。総則では、「各教科等の特質に応じた物事を捉える視点や考え方である『見方・考え方』は、新しい知識及び技能を既にもっている知識及び技能と結び付けながら社会の中で生きて働くものとして習得したり、思考力、判断力、表現力等を豊かなものとしたり、社

会や世界にどのように関わるかの視座を形成したりするために重要なものであり、習得・活用・探究という学びの過程の中で働かせることを通じて、より質の高い深い学びにつなげることが重要」とされている。児童生徒が教科等の特有の「見方・考え方」を働かせて、深く思考することができるような発問を工夫することが、児童生徒の「深い学び」へとつながっていく。

本研究では、発問を「児童生徒が『見方・考え方』を働かせて、『深い学び』の視点で学びを進めることができるようにする働き掛け」と定義し、「深い学び」を①～④の4つの視点で整理し、それらを促すような授業中のあらゆる場面での教師からの問い掛けや言葉掛け等と捉える。

教師からの発問は、児童生徒が思考を働かせて、深く考えるために重要である。授業におけるあらゆる場面での学習活動で、児童生徒の「見方・考え方」を働かせる教師からの効果的な働き掛けを通して、児童生徒の学びが活性化し「深い学び」の実現につながる。

(2) 必要感のある学び合い

第19次研究では、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」についての研究及び授業実践を行った（詳しくは研究紀要第49号を参照されたい）。一定の成果を上げた一方で、いくつかの課題も見られた。

特に「協働的な学び」を通して、他者と交流したり、力を合わせたりすることで、課題を解決し、よりよい答えを導き出そうとする姿勢を育むことができたが、一方で、「協働的な学び」が形骸化してしまい、本来の目的が達成できない状況があった。また、児童生徒によっては、誰と、どのような視点で交流するとよいのかが、はっきりとしていない様子も見られた。児童生徒にとって必要感のある協働的な学びを実現することにおいて、大きな課題が残ったと言える。

「深い学び」の4つの視点を意識する上で、他者との協働や交流は重要な要素である。児童生徒は、他者との交流を通して、自分の知識や経験と他者の知識や経験とを結び付けて、より理解を深めたり、異なる情報や思い、考え方を組み合わせて、新しい考えを生み出したりすることができる。「協働的な学び」のさらなる充実が、児童生徒の「深い学び」を実現していく上で必要であると考えられる。

1年次研究では、「対話的な学び」の視点の中でも、特に「児童生徒同士の協働場面」に焦点を当てた。これを「必要感のある学び合い」として、授業の中に明確な目的意識と視点を踏まえた、会話や交流を伴った学び合いを充実させて、「深い学び」の実現を目指す。

自らの考えを言語化し、相手に伝えようとする事で、考えを整理したり吟味したりする必要性が生まれ、情報を整理し、新たに学んだことと既存の知識とを結び付けることや、多様な他者の意見や考えと自分の考えと組み合わせて、新たな考えや意見、作品等を生み出すことにもつながると考えられる。

学び合いをする際には、児童生徒自身が「その活動をしたい」「する必要がある」と実感しながら行うことが重要である。課題を設定したり、学習活動を設定したりする際には、「深い学び」の実現に向けて、児童生徒が「見方・考え方」を働かせながら、他者と協働したいと感じられるような「必要感」を生み出すような工夫が求められる。

また、「協働的な学び」自体が目的とならないように留意することが重要である。そのために、話し合いや交流の際には児童生徒に明確な視点を与え、学び合いが行われるようにする必要がある。

ある。その際に、児童生徒が各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせられるように、教師は働き掛けや問い掛けを吟味しなければならない。

学び合いでは、自らの考えを言語化し、相手に伝えようとする中で、考えを整理し、新たに学んだことと既存の知識を結び付けたり、新たな考えを生み出したりすることができ、「深い学び」の実現につながる。その際に、学び合いそのものが目的とならないよう、教師からの適切な働き掛けが重要となる。

(3) 本時レベルでの振り返り

第19次研究において、「指導計画・評価計画」について研究と実践を行った（詳しくは研究紀要第49号を参照されたい）。特に「形成的な評価」に焦点を当て、児童生徒の学習改善や教師の指導改善のために、振り返りシートやICT機器などを用いて、形成的な評価の充実を図った。その評価を基にして、児童生徒が自らの学習状況を把握して自己調整したり、教師が指導内容の改善をしたりすることができた。

昨年度までの成果と課題を踏まえ、今年度は、「本時レベルでの振り返り」に焦点を当てる。自らの学びを丁寧に見つめ直し、学習の質を高めたり改善したりするための「振り返り」の充実を図る。そこで、本時の終末時に「文章表記による振り返り」を設定する。振り返る際の視点を与え、自らの言葉で言語化することで、その時間の学びが自分にとってどのような効果があったのか、不十分だったことや改善すべきことはなかったか、などについて考えられるようにする。

振り返りは、1単位時間だけで完結するものではない。単元を通して継続して振り返りを行い、毎時間の振り返りを蓄積していくことが求められる。そうすることで、自身の学びを充実させて次時につなげ、より深く理解したり、友達との協働のよさを感じたりすることができ、それが「深い学び」に結び付いていく。また、自分の学びを客観的に捉え、自己調整を促すこともできる。

振り返りで自分の学習を客観的に捉えて、学習の改善を図るためには、具体的な振り返りの視点を与えることが重要となる。例えば、「今日の学びと他者とのつながり」について振り返りを行うことで、自分の学びが、班員や学級の仲間とどのように関わったかを整理することができる。そうして、交流のよさを感じたり、今後同じ学習をする際の改善点等について考察したりして、学習を調整して学び続けることができるようになる。

文章表記による振り返りを通して、児童生徒は自らの学びを丁寧に見つめ直すことができる。振り返りをする際には視点を与え、かつ継続的に行うことで、児童生徒が自己調整をしながら主体的に学び続けようとするようになる。学習の意義や仲間との協働のよさなどを実感することで、学びが連続し、「深い学び」の実現につながる。